

# 機嫌のよしあし

倉 橋 生

毎日のことである。機嫌のよしあしは免れない。或は身體の具合にも變りがある。天氣の加減もある。昨日一昨日の疲勞のぬけぬけともある。家のこと、友のこと、身のことにつけて何かと屈托も折にはある。始終にこゝと上機嫌でのみ居るといふことは我々凡人には中々六づかしい。機嫌の悪い時は事々ものうく、おつくうになる。常には左程にも思はぬことが、うるさくもなればいら／＼と氣にも障る、まして心に心配ごとでもあるといふ時には、人の心配も知らないでと、ついぢれつたい氣にもなる。誰れであつたか讀み人は忘れたが、かういふ歌をどこで見たことがある。

我が胸のけふの憂ひも知らずして  
袖にまつはる子供達かな

お母様にさへ時には斯ういふ感じがあるといふ。

姉さんにもあるといふ。二十人三十人と多勢の幼兒をあづかる若い身には、あとでは濟まないと思ひながらも、つい起り易い感じである。保姆諸君とて幼稚園のみに活きて居る人ではない。親もあり弟妹もあり戀もあらう身の、小さい胸につゝみ切れぬ物案じは誰れにでもあることである。教職の長さをよく知ればこそ、抑へてこそ居れ、強ひて忘れようとこそ努めて居れ、秋を知る遊園の立木の蔭に、ふと憶ひ出で、そつと涙をふく様のこともある。今朝は不思議に折れては折れる青色「チヨーク」に病人の容態が氣にかゝり出す様のこともある。けれども笑まねばならぬのである。聲張りあげて唱はねばならぬのである。右から左から絶る幼兒に一年三百六十五日同じ機嫌で居なければならぬのである。

こゝろ内にあれば色そとにあらはる。之れは是非ない當然であらう。包める程の思ひならば誰れとて外には漏さぬ筈である。それを包めといふは

素より無理と知つての注文である。切ない思ひの努力である、併しその無理も切なさも幼児の爲といふことを思へば、強ち出来ぬ我まんでもあるまい。否、出来ても出来ぬでも是非しなければならぬ我まんである。つゝむに餘る心の思ひは、泣くには泣くべき處である。訴へるには訴へる處がある。何も知らぬ幼児の明るい心に、そのうす暗い一翳をだに投じてはならぬ。昨日に同じ温さを求めて来る幼児に、一滴の冷さをだに點じてはならぬ。心悲しくば尙更幼児にやさしくしてやれ。心よかせに淋しくば尙更幼児を抱きしめてやれ。心よかせにすぎない言葉使をしたり、味ない佛頂面を見せたりしては、それはもう我まゝといはれなければならぬ。たしなみのない、つゝしみのない氣まゝ氣随といはなければならぬ。前の歌を目に描いて見て、その美しい趣はどこにあるのであらうか。心には悶えながら、いつもと變らぬにこやかさを見せる、切ない心のいちらしさにあるのではないか

己れに克つた強い優しさにあるのではないか。そこに初めて泌々とした詩の味が成るのである。假りにもうるさいと袖を拂ふすげない、素振の一つだにあつたとしたら、そのうるさきは察しこそすれ、美しい詩はこはれて仕舞ふ。併し、之れはまだ修養の途中である。もう一段の修養を積んだ人には、此の二々の切なさが無くなるのであるらしい。その場々々に心の闘をして努めて己れに克つ要もなく、それが心の自然になるものであるらしい。心の内にはどの様の苦勞があつても、足一とたび幼稚園の門に入り、耳に幼児の聲を聞けば、そのまゝ活き／＼と心をおこすものであるらしい。そして如何なる時と雖も、不斷の愉色を顔に湛へて居られるものであるらしい此の聖に近い常性を得度いのは、切々と心を練る我等の修養の目あてである。今はたゞ其の途中、せめて我まゝからの不機嫌をつゝしみ度い。切角可愛い、子供達の傍に居て、心に子供を拒ける様